



図版 No.1 西村愿定《昭和の森》平成2年(1990) 油彩・キャンバス F30

昭和53年(1978)、昭和天皇在位50年を記念して天城峠一帯の国有林が「昭和の森」に指定され、「昭和の森・天城山自然休養林」として整備が進められた。昭和55年(1980)にはその中核施設として昭和の森会館が開館した。昭和の森会館は、現在は道の駅天城越え内の施設となっている。

本作は、昭和の森会館(現・道の駅天城越え)の駐車場から南方面の景色を描いたもの。中央に見える山は地元で「ナカノミネ」と呼ばれている。

昭和期に活躍した洋画家・西村愿定は、天城(現・伊豆市天城湯ヶ島地区)の人々から「げんてい先生」と呼び親しまれ、伊豆を「第二の故里」として生涯にわたり天城の風景を描き続けた。

西村は大正三年(一九一四)、東京府東京市小石川区(現・東京都文京区小石川)に生まれ、昭和一四年(一九三九)に東京美術学校油画科(現・東京藝術大学)を卒業。日展、光風会で評議員を務めました。

天城とのつながりは昭和三三年(一九五八)、当時伊東に在任していた書家で日本画家でもある内山雨海が結成した「天城山系自然観察隊」に参加したことをきっかけに始まります。その際に案内役を務めた旅館の主人・宇田博司と心を通じ合わせたことから、天城観光協会(現・伊豆市観光協会天城支部)のポスター原画を手がけることとなり、地域の人々との交流も深めていきました。この交流は、西村が平成五年(一九九三)に没するまで三六年間続きました。

本紙では、西村愿定と天城の人々の交流の様子とともに、天城を描いた風景画を紹介します。人々の温かなつながりに包まれた天城の姿をどうぞご覧ください。

# げんてい先生 天城を愛した画家 西村愿定

もと  
さだ

## 西村愿定略年譜

和暦	西暦	歳(満年齢)	できごと
大正3	1914	0	東京府東京市小石川区(現・東京都文京区小石川)に生まれる
昭和9	1934	20	東京美術学校油画科(現・東京藝術大学)入学
昭和13	1938	24	第25回光風会展 初入選、光風賞
昭和14	1939	25	東京美術学校油画科 卒業
昭和15	1940	26	光風会会友となる
昭和21	1946	32	光風会会員となる
昭和22	1947	33	資生堂画廊で初個展
昭和25	1950	36	第6回日展《二人の女の構図》特選
昭和30	1955	41	歌舞伎座「お蝶夫人」(水谷八重子主演)の舞台装置、美術を担当
昭和33	1958	44	「天城山系自然観察隊」参加(6月) 天城観光協会ポスター原画《浄蓮の滝》(図版No.2)制作
昭和35	1960	46	第3回新日展《レゲンデ》菊華賞
昭和36	1961	47	NHK「夜のしらべ」タイトルデッサン1年間制作
昭和39	1964	50	初渡欧
昭和47	1972	58	日展評議員となる
昭和50	1975	61	光風会評議員となる
昭和51	1976	62	『西欧に光りを求めて 西村愿定淡彩デッサン集』(エヌ・ジー・シー社)刊行
昭和57	1982	58	井上靖「猟銃」詩碑(滑沢渓谷)設計
昭和61	1986	72	『西欧随想 たった一人のエトランジェ』(未来社)刊行
昭和63	1988	74	『天城画帖 西村愿定作品集』(浄蓮の滝観光センター)刊行
平成3	1991	77	天城湯ヶ島町からアトリ工用地を寄贈される(4月) アトリ工竣工(9月)
平成5	1993	79	逝去、享年78歳

略年譜参考文献  
 光風会史編集委員会編『光風会史—80回のおゆみ—』光風会、1994  
 資生堂企業文化部編『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』資生堂、1995  
 東京芸術大学百年史刊行委員会ほか編『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』ぎょうせい、1997

## 出品資料一覧

図版No.	作家名	作品名	員数	制作年	技法・材質	サイズ	所蔵
1	西村愿定	昭和の森	1面	平成2年(1990)	油彩・キャンバス	F30	伊豆市資料館
2	西村愿定	浄蓮の滝	1面	昭和33年(1958)	油彩・キャンバス	F20	伊豆市資料館
3	西村愿定	湯呑(浄蓮の滝、滑沢渓谷、昭和の森、浄蓮春景、国士峠)	5点		有田焼		個人蔵
4		西村愿定愛用の煙草ケース・灰皿	各1点				個人蔵
5	西村愿定	グラス(グリユーネ・ヴァルト)	2点				個人蔵
6	西村愿定	山峡の村(長野部落)	1面	昭和54年(1979)	油彩・キャンバス	F8	伊豆市資料館
7	西村愿定	学校の見える風景	1面	昭和40年(1965)	鉛筆・水彩・紙	24.5cm×33.4cm	伊豆市資料館
8	西村愿定	滑沢渓谷	1面	昭和55年(1980)	油彩・キャンバス	F6	伊豆市資料館
9	西村愿定	滑沢渓谷	1面	昭和60年(1985)	油彩・キャンバス	F30	伊豆市資料館
10	西村愿定	早春国士峠	1面	昭和60年(1985)	油彩・キャンバス	F30	伊豆市資料館
11	西村愿定	『天城画帖 西村愿定作品集』	1冊	昭和63年(1988)			伊豆市資料館
12	西村愿定	「伊豆に憶う」直筆原稿(複写)	1冊	昭和61年(1986)			個人蔵

## 凡例

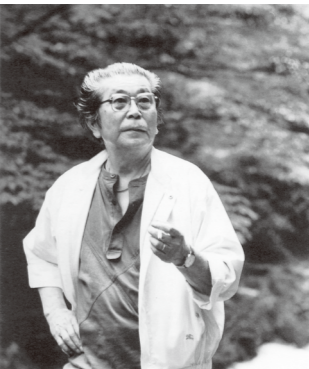
- ・本紙は2026年1月4日(日)から2月25日(水)の間、伊豆市資料館にて開催した企画展「げんてい先生 天城を愛した画家・西村愿定」に関連して制作したものです。
- ・本紙の図版No.は会場における展示順序とは一致しません。
- ・本紙に掲載した写真のうち、提供者名等のないものは松本由奈(伊豆市社会教育課学芸員)が撮影を行いました。
- ・展覧会の企画、本紙の執筆・編集は松本由奈が行いました。

## げんてい先生 天城を愛した画家・西村愿定

2026年3月31日発行  
 編集・発行 伊豆市資料館  
 〒410-2502 静岡県伊豆市上白岩425-1  
 TEL:0558-83-1859

## お世話になった方々・機関

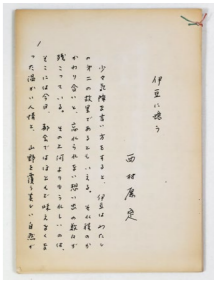
展覧会開催、本紙の制作にあたり、次の方々・諸機関には、貴重な資料の出品をはじめ、多大なご協力・ご指導・ご助言を賜りました。ここに記して、感謝の意を表します(敬称略・五十音順)。  
 浅田和久、伊藤道子、宇田治良、佐藤ゆう子、志垣直美、宿崎和彦  
 伊豆市観光協会天城支部、喫茶あまぎ、白壁、浄蓮の滝観光センター



西村愿定 滑沢にて 昭和63年(1988)頃  
 (西村愿定『天城画帖 西村愿定作品集』より)



図版 No.11 西村愿定『天城画帖 西村愿定作品集』  
 浄蓮の滝観光センター、昭和63年(1988)



図版 No.12 西村愿定「伊豆に憶う」  
 直筆原稿(複写)  
 昭和61年(1986)個人蔵

西村と天城の交流30年の記念に発行された作品集。『天城画帖 西村愿定作品集』に発行は浄蓮の滝観光センター、協賛は白壁荘、収められたエッセイ「伊豆に憶う」の天城湯ヶ島町、昭和の森会館、湯の国会館、天城 直筆原稿の複写。末尾に「他の予定」いのしし村と、旧天城湯ヶ島町内の企業や団体がとしてエッセイの項目が書かれており、名を連ねている。天城を描いた作品と、天城の人々の思い出を綴ったエッセイが収められている。 と思われる。

日展史編集委員会編『日展史17 日展編2』日展、1987  
 日展史編集委員会編『日展史23 新日展編3』日展、1993  
 西村愿定『天城画帖 西村愿定作品集』浄蓮の滝観光センター、1988  
 練馬区立美術館編『ねりまの美術'89』1989

「第二の故里」 天城とのつながり

西村原定と天城とのつながりは、昭和三年（一九五八）六月六日から九日にかけて行われた「天城山系自然観察隊」への参加をきっかけに始まりました（註1）。この調査隊は、天城山系の野鳥の棲息状況や植物分布の調査を通して、伊豆の自然や風景を新たな視点から捉え、記録・表現することを目的として結成された（註2）。

企画したのは当時伊東に在住していた書家・日本画家の内山雨海<sup>うかい</sup>で、内山を隊長に野鳥班・植物班・スケッチ班（註3）、録音班・文筆班・カメラ班・報道班の七班に分かれ、総勢約六〇名が参加する大規模なものでした。

この調査の際、西村は案内役を務めた旅館「白壁荘」（現・白壁）の主人・宇田博司と親交を深め（註4）、その縁から天城観光協会（現・伊豆市観光協会天城支部）のポスター原画を手がけることになりました（註5）。

宇田の案内で湯ヶ島周辺を丹念に歩き、浄蓮の滝と国士峠を候補地として制作を重ねた結果、浄蓮の滝を描いた作品（図版No.2）がポスターに採用されました。完成したポスターは狩野川台風の影響で到着が遅れたものの、修善寺の倉庫に保管されていたため被害を免れ、無事に発行されました。

その後、西村は天城の人々との交流を深め、「げんてい先生」と親しまれながら（註6）、

生涯の友「天城さん・ろまん」

西村には天城に、生涯の友とも呼べる友人がいました。白壁荘の主人・宇田博司と、浄蓮の滝観光センターの代表・伊藤春秀です。彼らは自らを「三人のロマンチスト」という意味で「天城さん・ろまん」と呼び、西村が天城を訪れるたびに、酒を片手に芸術について語り合いました（註1）。

伊藤は宇田、西村と親子ほど歳が離れていましたが、そこには年齢差を感じさせない関係性がありました。西村はその様子を次のように回想しています（註2）。「3人集まると夜を徹して酒を酌み交わす。天城おろしの吹きすさむ寒い晩には、旅館のバー・ミノで終ることを知らない酒宴にひたり、時には狩野川のせせらぎを聞きながら野天風呂で盃を浮かべる。晴れた日には昭和の森会館の中庭で、芝生にねころびながら花を賞で、とび交う雲の行方を追い、詩をうたい、あまり上手でない句をひねったりもする。こんな時、レストランの女性が気をきかせてビールをはこんでくれるから一層興がのり、芸術論に華をさかせ、喧々と女性観を論じあったりする。」こうした心安い交流は、作品の題材にもなりました（註3）。

三人で過ごした時間は、西村にとって創作の源泉であると同時に、かけがえのない心の拠り所でもありました。

伊豆を「第二の故里」として生涯にわたる天城の風景を描き続けました。天城を題材とした作品は、展覧会ではあまり発表せず、主に雑誌『アトリエ』に掲載されています。

旧天城湯ヶ島町への作品寄贈など地域への貢献が評価され、平成三年（一九九二）には町からアトリエ用地の提供を受け、町内に制作拠点を構えました（註7）。こうした交流は西村が平成五年（一九九三）に没するまで三六年間にわたり続き、西村の作品には往時の天城の姿が今も鮮やかに描き留められています。

註

- (1) 西村原定『天城画帖 西村原定作品集』浄蓮の滝観光センター、一九八八年。
- (2) 内山雨海「天城・伊豆の自然観察行」長尾宏也編『日本山岳風土記3 富士山とその周辺』宝文館、一九六〇年、二九九―三〇三頁。篠田英之介「天城山系群鳥譜」『マイクと言葉』宝文館、一九五九年、二〇―二三―三四頁。
- (3) スケッチ班は「天城山系自然観察隊スケッチ班作品展」として昭和三年（一九五八）七月一日から二三日まで、大丸美術部画廊で成果展覧会を開いている（アトリエ出版社編『アトリエ』三七七―一九五八年、一〇九頁）。
- (4) 宇田は当時のことを「画家の泊った旅館は私のうちではなかったが、先生はそのとき私の家の中庭に不法侵入して絵を描き、それを知らずにいた私は1月ばかり後に三越かどこかの画展で、その絵をみた。」と振り返っている（宇田博司「西村原定氏のこと」アトリエ出版社編『アトリエ』五二八、一九七一年、八〇頁）。
- (5) (1)に同じ。昭和三年（一九五八）時点では上狩野村観光協会だったと思われるが、ポスターの現物が確認できなかったため詳細は不明。

註

- (1) 西村原定『天城画帖 西村原定作品集』浄蓮の滝観光センター、一九八八年。
- (2) (1)に同じ。三人の出会い白壁荘内のバー「バー・ミノ」であった。
- (3) 『天城画帖 西村原定作品集』に掲載されたF30号の「好日さん・ろまん」（左図参照と、第一五回日展に出品されたF100号の「好日さんろまん」（白展編『昭和五十八年度第十五回日展図録』洋画）一九八三、日展編『原色版日展絵画集 1983-1984』一九八四）がそれにあたる。両作品には、左から西村、伊藤、宇田の三人が、それぞれを象徴するモチーフとともに描かれている。西村には絵筆、パレットとキャンパス、ヘビースモーカーであった伊藤には煙草（F100号の方のみ松葉杖も）、天城いのしし村村長の宇田にはうり坊と酒が配され、三者の個性が表現されている。また、『昭和の森』（図版No.1）にも描かれている「ナカノミネ」が遠景に配されていることから、この場所は昭和の森会館の中庭であると考えられる。
- 西村原定ご息女・志垣直美氏や伊藤春秀ご夫人、伊藤道子氏によると、日展の展覧会会場で作品の前に西村、伊藤、宇田の三人が並んでいた際、周囲の注目を集めていたという。また、伊藤は西村に対し、自身の顔が色黒に描かれていることに不満を述べ、二人の間で冗談まじりに金銭で解決しようとするやり取りもあったという。（取材日：二〇二六年二月二〇日、聞き手：松本由奈）



西村原定《好日さん・ろまん》 油彩・キャンパス F30 個人蔵

(6) 西村と交流のあった宿崎和彦氏の談によれば、「原定（もとさだ）」という名は難読であったため音読みで「げんてい先生」と呼ばれるようになり、天城ではその呼称が定着したという。（取材日：二〇二五年一〇月二日、聞き手：松本由奈）

(7) アトリエは「モン・ヴェール」と称した。『広報天城湯ヶ島』静岡県田方郡天城湯ヶ島町役場、二五四、一九九〇年・二六〇、一九九一年・二六四、一九九一年。下山忠男「西村画伯を偲ぶ」『町づくり50年』一九九七年、一六三―一六八頁。



図版No.2 西村原定《浄蓮の滝》昭和33年（1958）油彩・キャンパス F20



図版No.3 湯呑（浄蓮の滝、滑沢渓谷、昭和の森、浄蓮春景、国士峠） 個人蔵  
浄蓮の滝観光センターで土産品として販売されていた有田焼の5箇組の湯呑。各湯呑には西村による天城の風景デッサンがデザインされている。このほかにも、天城の風景を描いた油絵を転写した陶板画（陶器の板に絵柄を焼き付けたもの）も土産品として販売していた。



図版No.4 西村原定愛用の煙草ケース・灰皿 個人蔵

西村が愛用していた煙草ケースと灰皿。煙草は必ずケースに入れて持ち歩いていた。また、酒もよく好み、天城の人々とも多くの杯を交わした。いつもウイスキーをロックで飲み、保冷性のある陶器の杯を用いるのがこだわりであったという。

図版No.6 国士峠の麓にある長野部落を描いた油彩。『アトリエ』No.646に掲載された。白壁の宇田治良氏によれば、西村は歳が苦手だったため、屋外で絵を描く際には誰かに付き添ってもらっていた。本作を制作した際には治良氏が同行し、朝から夕方前まで描いていたという。（取材日：2025年10月29日、聞き手：松本由奈）



図版No.7 かつて市山に所在していた天城中学校を描いたデッサン。制作当時より赤暗く変色しているが、冬枯れの山々や晩冬の空気が表現されている。本作は『アトリエ』No.458に制作過程とともに掲載された。作家本人から天城湯ヶ島町へ寄贈され、長らく天城中学校に展示されていた。



左：図版No.6 西村原定《山峡の村（長野部落）》昭和54年（1979）油彩・キャンパス F8  
右：図版No.7 西村原定《学校に見える風景》昭和40年（1965）鉛筆・水彩・紙 24.5×33.4cm



井上靖「獵銃」詩碑（滑沢渓谷）2025年撮影  
西村は滑沢渓谷にある井上靖「獵銃」詩碑の設計も手がけている。



図版No.5 グラス（グリーンネ・ヴァルト） 個人蔵  
昭和の森会館（道の駅 天城越え内）にあるレストラン「グリーンネ・ヴァルト」（現・緑の森）で使用されていたグラスで、西村がデザインしたロゴマークがあしらわれている。

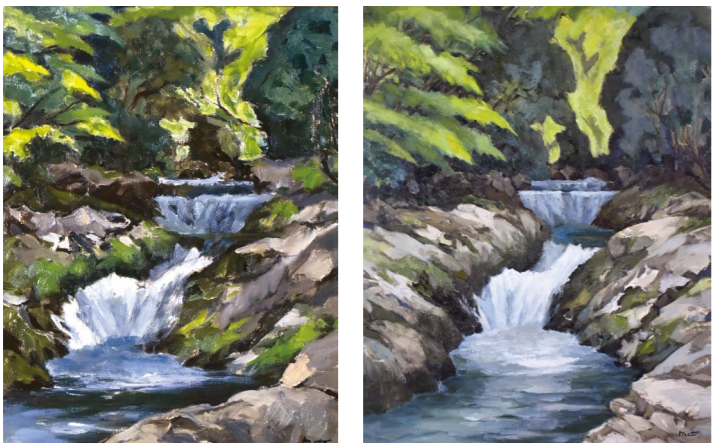
西村は他にも旧天城湯ヶ島町内の様々なロゴをデザインしており、以下のロゴマークは左から天城湯ヶ島町村おこし運動、白壁荘、レストラン樺、東府屋（現・東府や Resort&Spa-Izu）、グリーンネ・ヴァルト。



西村がデザインした旧天城湯ヶ島町内のロゴマーク（『天城画帖 西村原定作品集』より）



『アトリエ』No.646に掲載された。



左：図版No.8 西村原定《滑沢渓谷》昭和55年（1980）油彩・キャンパス F6  
中央：図版No.9 西村原定《滑沢渓谷》昭和60年（1985）油彩・キャンパス F30  
右：図版No.10 西村原定《早春国士峠》昭和60年（1985）油彩・キャンパス F30